

途上国経済（2007年度） 試験結果、成績優秀者および講評

2008年3月4日（火曜日）山崎圭一

1 試験結果（平均点など）

	総合成績 (100点満点)	期末筆記試験 (70点満点)	出席点 (20点満点)
平均点	74.9	53.1	12.2
標準偏差	12.9	10.0	4.7

2 成績分布

	実数(人)	構成比	構成比
90～100点：	19	10	9
80点台：	56	30	26
70点台：	59	31	27
60点台：	34	18	16
50点台：	11	6	5
49点以下：	9	5	4
試験欠席者	28		13
合計	188人	100%	100%

* レポートは、アマルティア・センの潜在能力論についてまとめてもらったが、10点を満点として採点した。今回提出した人のほとんどは10点満点とした。

出席点は、2回の小テストの合計点12点を7点へ圧縮し、10回の出席を13点に単純に膨張させて、合計20点として算出した。

3 成績優秀者（総合点）

	点数
1	97.5
1	97.4
3	96.8
3 インターネット版	96.3
5 では、氏名を	95.1
5 削除しました。	95.1
7	94.8
7	94.2
7	94.1
10	93.7
11	91.6

4 レポートへの講評

全体に適切にかかれていたが、とくに秀逸だという印象を受けたのは、I.T.君のレポートであった。なぜ秀逸だと感じたかということ、私の著書での「潜在能力論」の説明でわかりにくい点があることを指摘していたからである。たしかにいわれてみると、説明不足の面もあるし、さらに深く議論していく必要のある問題であるにもかかわらず、初心者向けの浅いレベルの説明でおわっているの、かえって混乱をまねいた嫌いもある。そこをついたコメントを含んだレポートであった。

5 試験の正答と講評

<設問1（正誤判定）>

正答は1番から順に、C、D、A、A、B、D、C、B

とくに7番と8番は、ほとんどの人が間違っていた。7番は有償資金援助の原資は何かという問題で、この4つの選択肢の中では郵貯と回答するのがベストである。税金も皆無とはいえないが、税収を原資とするのは、主には無償資金援助のほうである。8番のTIのCPI（corruption perception index）に関する問題は、難しかったかも知れない。汚職度合いをビジネスマンなどの「認識」で判断する理由の1つは、一見客観的とおもわれる、新聞報道の数などの指標に、問題があるからである。汚職報道が増えたことは、摘発の増大の反映でもあり、汚職撲滅努力が増大した結果ともいえるので、透明性の向上ともいえる。こうした一見「客観的」な指標が、かならずしもその国の透明性の指標とはいえないのである。

<設問2（キーワード説明）>

A.センのケイパビリティ論と、「帝国主義」についての簡単な説明をもとめる設問であったが、大目にて、できるだけ部分点を与える方向で採点した。後者については、超大国・支配国を米国1国とみるか、複数の先進国がそれにあたるかなど、見方がわかる論点がいくつか存在するイシューである。

<設問3（論述問題）>

途上国のかかえる問題、矛盾、課題について、原因、状況、対策の3局面にわけて論じなさいという趣旨の問題であった。原因、状況、対策の3つにクリアにわけてかくことが難しかったようである。その点の不十分さについては、かなり大目にて、全体として論旨がとおった論説になっていれば、点数を与える方向で採点した。

全体に具体的に議論が展開されていてよかったが、気になった点は、問題解決の対策として、ODA論を展開した人が非常に多かったことである。途上国の問題を、ODAではなく、途上国内部の努力で解決することについての展望を示した人は非常にすくなかった。私の講義の本来の目標は、脱ODAであった。途上国みずからが、どのように経済的に、また政策的に、先進国から自立できるかを展望しつつ、講義をすすめたつもりであったが、わたしの説明不足からほとんど伝わっていなかった。この点は今後の講義の反省材料としたい。